

指名コンペティションの実施結果について

第 15 回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展—日本館キュレーター指名コンペティションにおいては、8 名の候補者に展示企画に関するコンペティションへの参加を依頼したところ、うち 6 名の方からご提案をいただきました。

氏名	展覧会テーマ
東 浩紀 (株式会社ゲンロン 代表取締役)	怨霊の国を可視化する haunted nation revisited / reposed
大西 若人 (朝日新聞大阪本社 編集局 編集委員)	西野達プロジェクト HOTEL GIAPPONE
柴田 直美 (フリーランス 編集者／キュレーター)	flow 環境としての建築
福屋 粧子 (東北工業大学 工学部建築学科 准教授)	不在の街
山崎 亮 (株式会社 studio-L 代表取締役)	Participation in the “Celebration” -建築の誕生をみんなで祝う-
山名 善之 (東京理科大学 理工学部建築学科 教授)	en(縁):beyond—SHARING

(候補者氏名五十音順、敬称略)

各委員の選評は次のとおりです。(委員長以下氏名五十音順/敬称一部略)

水沢勉(国際展事業委員会委員長・神奈川県立近代美術館 館長)

吉阪隆正の設計によるヴェネツィアの日本館(1956年)を展示空間として十全に活かし、明快なコンセプトによって展示することは決して簡単ではない。この歴史的建築をまったく非歴史化してまったく無関係に現在の表現を盛り込むことも理論的には可能だ。それは空間を一見したところ美術(アート)化することである。

今回の提案のなかにも程度の差はあれ、そのようなアプローチが含まれていた。しかし、建築ビエンナーレにおいて求められるのはアートの体験ではない。かりにそれがあつたとしても、それを契機に現在の建築一般を考える機会にならなければならない。

そのような観点にたつて今回の提案を吟味するとき、3.11の未曾有の自然災害と人災に打撃を蒙っている、高度資本主義の日本において、山名善之氏案の「sharing」が最重要のキーワードとして印象に残つた。

「家族」「減築」「更新」「過疎」といった言葉を、「sharing」という発想から捉えなおし、そこに積極的な価値を発見しようとする。ささやかであればこそ、逆に丁寧に具体的に確認していくことが可能だ。それは高名な建築家による英雄的な行為ではなく、むしろ、匿名性にかぎりなく近づいていく現場に即した地道な創意工夫の積み重ねであろう。

しかし、それは、下手をすると、ゆるやかにのんびりとみんなで仲良く「sharing」することに退嬰化しかねない。山名善之氏の提案では、そこにもう一言「beyond」が付されていた。

しかし、現状を越えるだけ満足することなく、それを越えたさきで、さらに再び「sharing」が機能すること。つまり、たんなる「beyond SHARING」ではなく、「beyond—SHARING」となることを期待して、山名善之氏案を第一にわたしは推したい。地域性に根ざし、しかし、同時に地域性を越えて、今後の建築のあり方を問いかける可能性を感じるからである。

柏木博(武蔵野美術大学 教授)

6名の候補者からの提案書を読ませていただくとともに、プレゼンテーションをしていただきました。ビエンナーレの会場となる吉阪隆正の建築そのものの特性を再解釈する試みや、3・11をテーマにしたものなどがありました。また、現代美術の枠組みで扱った方がよいと思われる提案、あるいは建築展ではなくシンポジウムなら成立するだろうと思われるよう提案などもありました。

そうしたなかで、山名善之氏の提案は、日本の建築が現在どのような状況にあるのかということ、無理なく提示することができるのではないかと思えました。すでに世界的に知られている建築家の作品ではなく、若い世代の建築家による実践を事例として示すというものでした。それは、大規模な建築作品を実現しようとしているのではなく、目の前の日々の社会的問題に対して、建築がどのように応えていけるのかというものでした。

血縁関係のない人々がどのように住まいをシェアしていくか。高齢化社会では、これまでのように住まいを拡張(増築)するのではなく、縮小(減築)するという考え方もあるのではないか。あるいは、コンバージョンの新しいあり方。また、大都市から離れて、人口減少する地域への「創造的過疎」の可能性。といった4つの事例は、一見地味に見えますが、人口減少や高齢化などの社会的問題にこまやかに応えていこうとする若い作家たちの現状を見せてくれるのではないかと思えました。

北山恒(横浜国立大学大学院 教授)

第15回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展のコミッショナーを選考する委員会に参加したが、インタビューには出席できなかった。

前回の14回のヴェネチア・ビエンナーレのときは総合ディレクターのレム・コールハースから事前に統一テーマが出されたため、日本館のコミッショナー選考もその影響を受けた。そこでは、ビエンナーレ事務局の建築展のコンセプト見直しがあったようである。建築家の作品展示ではなく、社会性を持つ展示内容が要求された。15回の総合ディレクターがアレハンドロ・アラヴェナになったのにもその方向性を感じる。今、建築および建築家の社会的位置づけは大きく変わろうとしている。その時代感覚をもった展示内容が要求されているのだと思う。

今回の6名の候補者の提案書を読ませていただいたが、いずれの案も建築が直面している問題からはやや外れているように思えた。その中で、山名氏の提案している内容は、趣旨は異なるが、現在の日本の社会状況を顕在化させる可能性のある素材であるように思えた。

それは4つのテーマが設定され、それに対応する若手建築家の仕事がサンプリングされるというものがある。展示コンセプトは明快ではあったが、展示空間の計画は弱いと思えた。作品を主題とするのではなく状況を主題とすること、という委員会の要望が伝えられ、さらに4つテーマが明確になるようなダイアグラムを求め、その論理構築をサポートできる協力者を招聘するように依頼した。未だ曖昧な部分を抱えているが、展示構造はできている。人選等若干の調整を行いながら、展示空間を固めていただきたいと思う。

島敦彦(愛知県美術館 館長)

今回の指名コンペティションによる6案は、短い準備期間にもかかわらず、それぞれの方向性を示していて興味深いものだった。しかし、技術的な問題やテーマの新規性、あるいはテーマと実際の展示との関連など、さまざまな検討課題も散見された。

「flow 環境としての建築」を提案した柴田直美は、日本館の内部と外部を循環する水路をめぐらせるという野心的な案であったが、水の波紋や光のきらめきだけで、どこまで意図が通じるのか、また落葉の問題や維持管理の面で、困難が予測された。

福屋粧子は、3. 11後の建築を再検証することを考え、「不在の街」と「不在のかたち」を日本館内に対比的に展開する案だったが、両者の関連性が視覚的にうまく伝わるのか、前々回の出展企画「みんなの家」と比較して、弱く感じられた。

大西若人の「西野達」による作品は、日本館内にホテルを作るという体験型作品であったが、西野が美術家としてすでに国際的に活躍する人だけに、建築展ではなく美術展での展開がふさわしく思われた。

山崎亮の「建築の誕生をみんなで祝う」は、コミュニティ・デザインの手法で建築を捉えなおす試みの提示であったが、さまざまな取り組みの事例紹介としては魅力的であったが、国際的な建築展で新たな問題提起となるのか、疑問が残った。

東浩紀の「怨霊の国を可視化する」は、フクシマ以後の日本のあり方を元寇まで遡って根源的に問う意欲的な案。しかし会場全体を建築的な装置として示すには、歴史的な問題提起が盛り込まれすぎた感があった。

そんな中で、山名善之の「beyond－SHARING」は、日本における喫緊の課題を「減築」や「創造的過疎」など4つのテーマのもと、若い世代の建築家やグループの試みを通じて、提示する案。前回の建築展が「倉」として近代建築の過去の集積が示されたのに対し、新たな可能性が示されることが期待され、今回のキュレーターとして選出した。

長谷川祐子(東京都現代美術館 チーフキュレーター)

変動するグローバルの情勢を反映し、そこにポリティカルなコメントや提案をだしていくという意味で建築とアートのビエンナーレは接近してきている。

山名善之の提案は、総合ディレクターのアレハンドロ・アラヴェナのステイメントの中にある現場からの声をどのように全面に押し出し、見えるものにしていくのかという点、そして現状にそった単なる縮小や削減ではなく、より現場の知恵やテクノロジーやシステム構築によってこれにポジティブな提案をもとめた点に対して、山名の提案はこれにこたえたものといえる。

多くの小さなしかし地に足のついた試みが現場でなされている、個の尊厳を維持しながら共生の知恵を形にしていくこと。

日本独自の文化的背景から生まれた知を普遍化し、他者と共有できるものにする、プレゼンテーションで問われるのはその部分であろう。

映像作家や視覚デザインの専門家との協働を期待する。

港千尋(多摩美術大学 教授)

アレハンドロ・アラヴェナのようなコミュニティの力やヴァナキュラーな知を重視しリサーチを行うタイプの建築家が総合ディレクターに着任したことは、期せずして、現在の日本における建築と社会的要求について考えるうえで、タイムリーなことになった。具体的には新国立競技場の設計をめぐるのだが、これほど現代建築に社会的注目が集まるというのは、少なくとも日本においては極めて例外的である。それは 3.11 大震災の後、国家が主導する巨大なプロジェクトに対し、市民社会が率直に疑問を呈し、市民的感覚を表明することが当たり前になったことの証左かもしれない。

今回のプロポーザルのなかで、こうした社会からの疑問や要求に対して、建築の側がどう応答するのかを、選考のうえで考えていた。山名氏の提案は、日本の若手建築家の創意と活力を通して、新しい市民社会と建築の関係を問いなおす点で、いくつかの重要な要素を含んでいる。特に「減築」という概念は興味深く、これは日本のみならず国際的にも通用すべきものとして、議論されるべきだろう。

ただし、それが日本の建築界の内部だけで終わる「特殊用語」にとどまるならば、国際建築展の枠組みのなかで訴えることはできない。地域的特殊性の核心を同時代世界に接続する工夫こそが、beyond—SHARING を可能にすると期待を込めて、同案を積極的に支持したいと思う。

南 薫宏(女子美術大学 教授)

最終的に山名善之案に至った理由は、「滅築」などに象徴される一連のアクティビズムに新鮮な刺激と、学閥も含め極めてヒステリックな我が国の建築界の状況を飛び越えていく、しなやかな跳躍力を感じたからだ。

しかし個人として今回の選考において私が一番推したいと思ったのは、東浩紀の「死」をテーマにした案であった。それは東日本大震災以後の最初の建築ビエンナーレの選考、つまり前回の第14回展、伊東豊雄案が選ばれ、結果金獅子賞にも輝くことになるのだが、その伊東も含め、指名された候補者たちの多くがあのような未曾有の大災害を契機として、世界の再生を期し、建築の可能性を模索する案を提出してきたとき、誰一人として「死者」と向き合う建築を想起しようとする者がいなかったからだ。そしてプレゼンテーションを終え、あなたという「みんな」には「死者」が含まれていますかと質問したときに、虚を突かれたように見せた逡巡する伊東の表情を、私は忘れられないできた。

そして東日本大震災後、2回目となる今回の選考において、初めてしかもそれが建築家ではなく、思想家の東浩紀によって、「死」と対峙し、共同体をつなぎ止めてきた文化としての「死」の富を死守するだけでもいうべき想いと営みを、建築のコンテキストにおいて検証する案が提案されたことに、あの瞬間の痛みを忘却し、偽装の可能性に再びの場を得ようとする閉じたままの建築の現況、そして我が国の精神が置かれているその位相を照射する、ひとつの批評的視座を得たように思われたのだ。

しかし問題は象徴的な視覚化のあまり、元寇に始まり、安政の大地震、沖縄戦、東日本大震災という展開に飛躍がありすぎ、また日本人の死に限定されているため、日本人が強いたアジアにおける死の問題には触れられず、ベネチアに集う世界の観客にその「死」に対する「怨霊」(これも少し難しい言葉であるが)を伝えるには、言説を加えるにせよ、あの限られた空間では未消化のプレゼンテーションになってしまう危惧を否定できず、残念な結果となった。

当初、東が候補者の一人に指名されたとき、私は密かに社会建築論としても読める『弱いつながり』をベースとした案を期待したりもしたが、いずれにせよ、建築業界に止まらず、様々な分野から新鮮なコンテキストにおいて「建築」を再読、批判し、新たな可能性を世界に問う今回の案を評価したいと思った。